知床岬赤岩地区羅臼昆布エコツアー実施内容

１．提案の背景・理由

知床半島先端部地区は、一般観光やレクレーション目的の動力船による上陸が認められておらず（「知床岬地区の利用規制指導に関する申し合わせ」）、全く人の立ち入らないイメージがあるが、羅臼町側の海岸線では 70 年以上前から昆布漁が行われ、50 代以上の地元住民は岬などでの漁労活動を経験しており、知床の自然についての体験を自らの経験から語ることができる。しかし、先端部地区の漁家は年々減少しており、この地区での漁労活動そのものが見られなくなる可能性があり、先端部地区の自然や歴史を知らない地元住民が増えつつある。
観光客並びに地元住民に対して伝統的に続く羅臼の漁業活動を現地で紹介し、知床における人と自然の関わり合いや共生の歴史を後世に伝え伝承してゆく必要がある。知床の豊かな海の生態系に支えられて、原生的自然環境の中で生活しながら家族単位で営まれていた、漁業と自然との共生の歴史を町内外に伝えていきたい。

２．事業の目的

知床岬の先端部赤岩地区で行われている昔ながらの昆布漁に触れ、知床半島先端部において自然と共生しながら漁業を営んできた歴史・文化を学ぶ機会をエコツアーとして提供する。

１）本来の羅臼昆布漁の漁法・先人の苦労を学ぶ

赤岩地区では、今も変わらず昆布漁期には番屋へ移住し、人力での浜ならし～天日で干すなど昔ながらの作業工程により近いかたち１で羅臼昆布漁を行っている。
道路が整備された地域では、ブルドーザーでの浜ならし、乾燥機での人工乾燥に頼っており、羅臼昆布のかつての作業工程を学ぶことはできない。

２）羅臼昆布漁の歴史を学ぶ

知床沿岸の昆布漁が本格的に始まったのは交通網が整い始めた大正時代。赤岩の昆布漁は大正６年頃に始まっており、当時赤岩の番屋は 5 戸あまりだった。川崎船（帆船・艪５つ）をチャーターして順調にいけば８時間ほどかけて苦労して移住した。
次第に道路が開けるにつれ、大阪方面から交易商人の手で良質な昆布が注目され始め、良質な昆布を生産できる赤岩地区で昆布漁に従事する者が増えた。機械船の親船に何隻もつながった船が岬方面へ向かう姿も夏の風物詩だった。チャッカ船・ディーゼル船の普及によって、昭和 45 年には 56 軒（1 軒あたり少なくても 5 名は移住していた）もの番屋が建ち並ぶほどになり、もっとも赤岩地区での昆布漁が盛んだった。大きな労働力だった子供たちは 2 学期の始業に間に合わないため、学業の遅れを補習するために教員が巡回指導していた。
その後、スケソ漁の豊漁により格差是正が図られ昆布漁の権利を返上したり、船外機の進歩・普及により移住せずとも昆布を獲れるようになったこと、また、乾燥機の普及によりその燃料となる油の運搬の便利な場所へ移動したことで、赤岩地区での昆布漁家が減っていった。現在は２軒の漁家がある２のみ。

３）知床岬先端部の暮らしについて学ぶ

初期の番屋は、流木を集めてピラミッド型の小屋を作り、草を刈り隙間を埋めて雨露をしのいだ。食料が底をつくと魚を獲って食べるなど原始時代にも似た生活が続いていた。

現在は赤岩地区には、先述した番屋の次世代である昭和時代の長谷川番屋が現存 3 しており、ナラの木のはりやカムロなど、当時の暮らしの様子を知ることができる。他の地区に現存する番屋はない 4。

４）知床の自然の雄大さ・過酷さ・恵みについて学ぶ

切り立った連山を間近に見ることで知床半島の成り立ちを学ぶとともに、
ペキンの鼻以北と以南では天候が全く違い、羅臼側が雨の時でも赤岩近辺は快晴の日が多く、効率よく天日干しが行えたことや、海流や岩礁により良質の昆布が密林のように生い茂り、昆布を干す広い海岸が広がっているという、東側の特徴 5 を知るとともに赤岩地区で苦労しながらも漁業を続ける理由を学ぶ。
かつては人力で移動していた赤岩地区へ行き、知床半島を船から観察し、実際に生活していた長谷川番屋の地を踏むこと 6 により、その距離感・自然・気候を感じ、その雄大さや不思議さ、過酷さを知るとともに、今も変わらず赤岩地区の岩礁に生い茂る昆布を観察し知床の自然の恵みを実感してもらう。
また、赤岩の全く護岸されていない海域 7 と護岸された海域との昆布の生育の違いをも学ぶ。

３．実施内容及び実施ルール

⑴期　　間　昆布漁期のうち最大 30 日間（漁期は概ね 7 月 15 日～8 月 15 日）
⑵場　　所　羅臼町内
　　羅臼町内知床岬赤岩地区については礫浜の学習ルート（下図参照）に限る
⑶利用制限　１年間の利用人数を 600 名（1 日 1 回×最大 20 名×最大 30 日）までとする
⑷実施体制　主催者：（株）知床らうすリンクル、ワイルドライフクルーズ
　　監修者：一般社団法人 知床羅臼町観光協会

当ツアーは、ガイドの専門的な知識だけでなく地元漁業者や昆布漁経験者との信頼関係及び連携の下で、高い質を担保できるものであるため、３年間のモニターツアーを実施してきた事業者を今後の主催者として指定する。ツアーに同行する先端部での昆布漁経験者については、主催者と信頼関係を築ける経験者に主催者から依頼するものとする。

⑸役割分担　主催者：ツアーの催行、モニタリングの実施、その他広告・集客等ツアーに関わる全般
　　監修者：最終承認を受けた際の条件の履行状況の確認及び助言
　　実施状況及びモニタリングの結果を適正利用エコツーリズム検討会議に報告する

⑹ツアー内容及びスケジュール

【１日目】
①羅臼ビジターセンター見学
・知床自然・漁業・知床の利用の心得についてガイドが解説
②水産物鮮度保持施設（昆布倉庫）見学
・昆布漁の仕組みや作業工程についてガイドが解説
③現在の昆布番屋見学
・現代の昆布漁の干場・作業場所についてガイドが解説

【２日目】
④最古の番屋見学
・相泊港集合

・靴裏を洗浄し乗船・出港
・船上で知床半島に関する解説、ネイチャーウォッチング
・最後の送電線、定置網漁業、マス遡上、昔の昆布漁の移動について解説
・昆布漁見学・昆布漁について解説
・船上から海中に生い茂る羅臼昆布を観察
・赤岩地区礫浜に上陸
・ヒグマの回避方法及び対処法をレクチャー
・希少植物に関する解説と注意喚起
・最古の番屋見学、ガイドによる解説
・赤岩地区で乗船・出港
・相泊港着
⑤ルサフィールドハウスに情報提供

【荒天時・昆布採取の早期終了時の代替内容】
・荒天時・・・中止
・ペキンの鼻以北が荒天・・・モイルス湾でのレクチャーに変更
・昆布の採取作業が終わったとしても、昆布製品化までは２ヵ月かかるため、その他の作業を見学もしくは体験する。

⑺モニタリング
①赤岩地区番屋前の定点写真撮影により植生状況をモニタリングする
②満足度及び知床・羅臼昆布の評価に関して、数年に一度アンケート調査を行う
③その他
・ツアー中に確認できた野生動物の出現状況について、主催者がルサフィールドハウスに情報提供する。
・ツアー中に確認できたトレッカー・カヤッカーの先端部の利用について、主催者がルサフィールドハウスに情報提供する。

⑻安全対策・環境保全・維持管理
・事前レクチャーを行う
・上陸時に長靴の底を洗い外来種の持ち込みを予防する
・警戒笛を鳴らしてヒグマとの遭遇を回避する
・保険に加入する

【気象の急変】　航海できない場合は番屋に避難する
【船の故障】　番屋からの衛星電話連絡により、船で迎えに行く。
番屋まで移動できない場合は、岸壁から上陸し陸路で移動する。
【船舶信号】　漁業者と区別出来る旗を揚げて実施する。海難信号旗を用意する。

４．知床エコツーリズム戦略との対応

１）３つの原則と対応

○遺産地域の自然環境の保全とその価値の向上
漁業活動の紹介は海上（船上）及び礫浜で行われるため植生への影響はなく、世界自然遺産知床の自然を体感させることで、守るべき知床の価値や重要性を認識できる。
・ガイドがルールを理解させ行動範囲を限定することで、盗掘や踏み荒し予防を徹底。

・海中を覗いたり、昆布の生育の仕組みを学び、海域を含む知床の特長を認識させられ、知床全体の評価を向上する。

〇世界の観光客への知床らしい良質な自然体験の提供
ガイドが知床の先端部地区で伝統的に行われてきた漁業活動を現地で紹介することで、知床における人と自然の関わり合いを理解してもらえる。豊かな自然を守りながら育んできた漁労文化を知ることで、より質の高い自然体験の提供に繋げる。

〇持続可能な地域社会と経済の構築
新たなツアーの開発はガイド事業者や宿泊施設の収入につながるため、地域社会と経済に貢献できる。自然環境保全への理解者を増やすとともに、エコツアー催行による利益を更なる伝承と環境の保全に役立てる。

２）８つの必要な視点と対応

〇地域主体・自律的・持続的であること
羅臼の観光協会及び関係者が作る中間システムがエコツアーを催行することにより、主体的・自律的に地域をマネジメントしてゆくことで、持続的に実施する。

〇共有・協働・連携・ネットワーク
観光協会管理の元、ガイド事業者や瀬渡し業者、町民ガイド（元漁師・現役漁師）が中心となって、良質な機会の提供することで利益を得ることで、継続的に実施していく。行政からの指導やアドバイスをいただき連携の元、実施する。

〇自然環境を保全すること
実施ルールを作成する。ルール周知とルール徹底のために、実施体制及び役割分担を定める。

〇自然生態系に関する理解を促進すること
羅臼ビジターセンターにおいてガイドがレクチャーすることで、知床の自然と漁業の共生に対し理解を深めることができる。
先端部赤岩地区で昆布が繁茂している様子を見ることで、海・川・山のミネラルのつながりを実感できる。

〇地域の文化・歴史的背景を踏まえること
1910 年ごろから始まった岬地区での羅臼昆布漁について、かつて番屋が建ち並び家族で移り住み、総出で昆布漁に取り組んでいたことを、町民ガイドからのレクチャーにより紹介する。
世界自然遺産に登録されてからの新しい羅臼町のイメージだけでなく、登録される前から脈々と受け継がれてきた自然との共生方法、住民が自ら親しみ守ってきたことについて学ぶことができる。
地形や地名、ヒグマとの共生方法について知ることで、アイヌ民族文化や和人とのかかわりについても学ぶことができる。

〇自己責任の原則と管理責任の分担
参加するエコツーリストに対し、ガイドは安全・リスクに関する情報を十分に伝えるとともに、安全確保のための備えを事前に行う。関係者は海上保安・消防の安全講習を受講する。

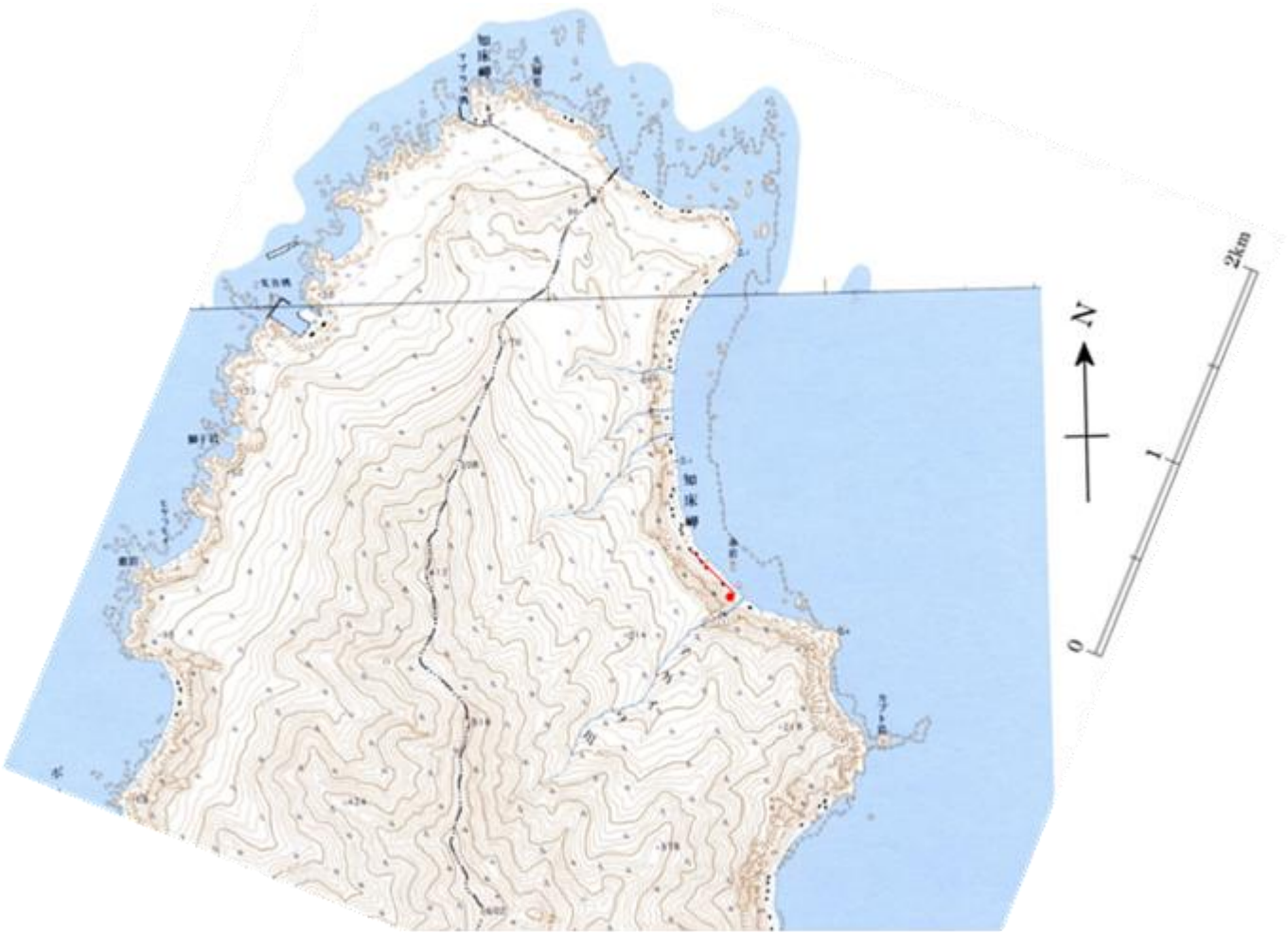
〇知床ブランド価値を高めるという視点を持つこと
知床の自然や根室海峡、流氷などの広い視野でのレクチャーとツアーで自然を体感することにより、

羅臼町の昆布以外の魚介類へのイメージや、山・海のアクティビティについても良質な体験できることが間接的に認識させられる。

利用を制限し、自然と共生して営まれてきた昆布漁を知ることで、自然遺産となった理由でもある「山と海とのつながり」について理解できる。昆布が単に「高い」「稀少」という単一的な評価ではなく、苦労や品質向上の取組について理解される。

知床における人の資源利用の歴史を追うことにより、知床の産品は自然の恵みだけではなく、人の関わりで生み出された恵みでもあることを学ぶことができる。原生自然の知床という価値観からあらたな価値を生み出すことができる。

〇順応的管理型であること

実施期間の植生モニタリング、満足度や知床および羅臼昆布への評価に関する調査を行い、本ツアーの定量的・定性的な評価をするとともに、実施内容の充実・改善・精査する。

ツアーで得られた情報は、羅臼ビジターセンターやルサフィールドハウスへフィードバックする。